

九州北部豪雨から10年

① 花を供え、手を合わせる山部さん。

② 山部さんの実家から土砂崩れの現場を望む。



悲しみ新たに教訓つなく

九州北部豪雨災害追悼行事

凄まじい豪雨の中、避難を呼びかけ続けた防災無線。あれから10年を経て、スピーカーから流れたのは祈りのサイレンでした。

死者21人、行方不明者1人。阿蘇市に甚大な被害をもたらした平成24年九州北部豪雨から7月12日で10年。午前10時に市内全域でサイレンが鳴らされ、災害の犠牲者への祈りが捧げられました。

四季彩いちのみやで開かれた追悼行事には遺族や関係者約70人が出席。サイレンに合わせて全員で黙とうを捧げました。

式典では、一の宮町三野で土砂崩れで父を亡くした白石勲さん(古城4区)が遺族を代表してあいさつ。「父があの時避難していれば命をおとさずに済んだと思う。あの災害の教訓を後世に伝え、これからも命を守る行動を必ず実践していく」と誓いました。

災害のことを知ってほしい

式典後、長崎県から出席した山部経浩つねひろさんは一の宮町手野の実家を訪れ、花を手向けました。山部さんはこの家に2人で暮らしていた父親の山部十七男さんと母親の美佐子さんを土石流で亡くしました。

両親のいる実家を離れ、長崎で暮らしていた山部さん。避難の呼びかけが届いてさえいれば、両親は避難していたと考えています。「父親はいわゆる肥後もっこす。頑固な人でした。それでも台風のと きなど、市から避難の情報などがあればよく避難していました」。それだけに今でも後悔していることがあると言います。「あのときは長崎でも大雨が降っていた。避難せなよと電話でもしていれば…」

10年前、当時生まれたばかりだった孫を盆には見せに行くという話をし

いたという山部さん。いつかは孫も阿蘇に連れてきて災害のことを伝えたいと考えています。

「自分の命を守るために、災害のことを知っておいてほしい」

「7月12日、今から10年前の今日、私は4歳でした」

追悼行事で、市の将来を担う世代の代表として誓いの言葉を述べた一宮中3年の住夏綺さん（北2区）はこう述べました。

あれから10年、当時のことを知らない若い世代が増えていきます。災害を経験した世代も、月日が経つにつれて記憶はどんどん薄れていきます。将来にわたり安全な暮らしを実現するために、教訓を後世に伝えていくことが必要です。

当時の記録を残すべく作成された冊子が2つあります。1つは、災害からおよそ1年半後に市が発行した「九州北部豪雨災害記録誌」です。

もう1つが、ボランティアの手で作成された「阿蘇07・12九州北部豪雨災害記録集」阿蘇からの知験」です。ボランティアの中心となって作成を進めたのが「災害NGO結」の代表・前原土武さん。前原さんは東日本大震災でのボランティアをきっかけに「災害NGO結」を立ち上げ、以来、国内各地の被災地で災害からの復旧・復興を支援する活動を続けています。九州北部豪雨災害のときも前原さんはす

た。床下の泥出しや消毒など懸命な作業の結果、数か月後には元の家で過ごせるようになりました。「ボランティアの人たちのおかげ」と渡邊さんは感謝します。

國津育美さん（西1区）も渡邊さん宅で復旧に尽力したボランティアの一人でした。熊本市内に住んでいた國津さんは、阿蘇市でのボランティアが足りないということを知り、「私にもできることがあるかもしれない」と災害ボランティアセンターを訪れました。「体の小さい私でも意外とできることは多いな」。初めての災害ボランティアでしたが、役に立てたという実感があつたそうです。

センターではできないことを

國津さんはボランティアセンターの



國津育美さん（左）と渡邊スミ子さん（右）。

経験から学び、生きた防災に
もう1つの災害記録誌



ぐに阿蘇に入り、現場を走り回りました。必要な支援について調査し、速やかな支援につなげました。

教訓が生かされていたのか

特に被害の大きかった古城区・梨地区には何度も足を運びました。そこで地域の人々が平成2年に発生した7・2水害の話をするのを聞き、約20年前に災害が起きたということを知りました。より詳しく調べようにも当時の資料がほとんど見つからず、「当時の教訓が生かされなかったのでは」と考え、災害記録集の制作を決めました。制作は資金を集めることから始まりました。災害のがれきを加工したキーホルダーをイベントで販売。関係者へのインタビューは、文字起こしだけでボランティアが行いました。構成やレイアウトも災害支援を通じて全国で知り合ったボランティアがインターネットを通して協力。思いが詰められた手作りの記録集は平成26年に完成しました。86ページにおよぶ記録集には26人の証言を掲載。それぞれの証言から得られた教訓を記しました。前原さんは「災害で被害を受けたこと、そこから復興していったことを忘れないでほしい」と強調します。



前原土武さん（平成25年撮影）

記録集はこんなことばで締めくくられています。「経験」から学び「生きた」防災に繋げよう／明日を生きる者のために」

災害ボランティアの働き

一宮町古城の三野地区。大きな被害を受けた地区のひとつです。

渡邊スミ子さんは生まれてから現在まで80年以上にわたりこの土地で暮らしています。10年前の水害では土砂崩れにより敷地内の納屋が倒壊。自宅はなんとか倒壊を免れましたが、1階の床まで土砂が押し寄せました。

渡邊さんもうここには住めないと思うほどの被害の中、救いの手を差し伸べたのがボランティアの人たちです

「ボランティアのおかげ」

人と人のつながり大事に

國津さんは阿蘇での活動を継続していくため、平成27年に阿蘇に移住。「この人が阿蘇にいてくれるだけで安心します」と渡邊さんは微笑みました。

前原さんは災害に強い地域にするためには人と人の繋がりが重要だと話します。「人口が減少している現代社会だからこそ地域の人と人のつながりが大事です。野菜をおすそ分けしたり、困っている人がいたら手を差し伸べたり。こうした助け合いは、災害時に被害を小さくすることにもつながります」

災害に強い阿蘇を未来へ

平成28年4月の熊本地震、同年10月の阿蘇中岳第1火口の噴火など、この10年の間も阿蘇は災害に苦しんできました。

災害の記憶を未来につなぐこと。人と人のつながりを強くすること。災害に強い地域にするために大事なことについて私たち一人一人が考えなければなりません。追悼式典で誓いのこと



住夏綺さん